

第1回 吹田市環境審議会 議事概要

令和元年(2019年)5月23日(木)

14:00~16:00

吹田市役所 高層棟4階 特別会議室

<出席委員>

上甫木昭春	委員 (会長)	江川直樹	委員	芝田育也	委員
三輪信哉	委員 (副会長)	小幡範雄	委員	澤田直己	委員
五十川有香	委員	足立将一	委員	井口直美	委員
山根建人	委員	坂口妙子	委員	門杉健一	委員
田中美津也	委員	上口浩幸	委員	中野政男	委員
牛田敏英	委員	三田康子	委員	山口淳	委員
山口耕右	委員				

<欠席委員>

近藤明	委員	塚田朋子	委員	山中俊夫	委員	和田武	委員
小川勉	委員	西田ヒロ子	委員				

※委員25名中19名の出席により吹田市環境審議会規則第5条2項の規定である会議の開催要件を満たしている。

<事務局>

辰谷副市長 中嶋環境部長 道澤環境部次長 平野環境政策室長
楠本環境政策室参事 各務主幹 丸谷主幹 辻本主査 柏木主査
倉本主査 八木主任 北係員
(株)建設技術研究所 3名

<関係室課>

林地域環境課長代理 信川環境保全課長 田中事業課参事
白田資源循環エネルギーセンター所長 福山破碎選別工場長
野口総務交通室主幹 山内道路室参事 小原公園みどり室参事
西野公園みどり室主査

<傍聴者> 3名

<次第>

【審議事項】

1 吹田市第3次環境基本計画素案について

【報告事項】

2 その他

- (1) フューチャー・デザインワークショップについて（報告）
- (2) 中核市移行に伴う計画への反映について（報告）

－開会－

副市長挨拶

新規就任委員紹介

吹田市第3次環境基本計画素案について

会長

まず第1章から第3章までで、ご意見があればいただきたいと思いますが、いかがでしょうか。

A委員

骨子案から素案に移って、良い計画になっていると感じました。全体を通じての質問ですが、総合計画と基本計画との関連性について伺います。まず1点目が、P.10、分野別基本目標が総合計画における施策にあたるのではないかと思う。ただ、総合計画と文言がずれているので、敢えてずらしているのか、同じにしていない理由を伺いたい。

事務局（柏木主査）

総合計画においても、環境に関する指標というものはあるが、枠組みとしては、第2次環境基本計画を引継ぎながら、第4次総合計画との整合性を図る。現時点で、エネルギーや資源循環といった重点的に取り組まないといけないことについては、第4次総合計画にも掲げているものではあるが、引き続き第2次の現行計画の枠組みを変更せず、より課題解決のために取り組むというところで、今回は第2次の現行計画をそのまま引き継いでいくところです。

A委員

どちらがベースかを伺いたいのですが。第4次総合計画がベースでこれを作るべきなのか、第2次環境基本計画をベースにしてこれを作るべきなのか、市としては、どちらですか。

事務局（柏木主査）

まず、第4次総合計画の計画期間や指標はベースとはなっていますが、環境の計画として取り組むべきものとしては、現行計画をベースとしています。

A委員

基本的には総合計画がベースであると考えている。例えば、エネルギーの部分で、「限りあるエネルギーを大切に使う低炭素社会への転換」と書いているけれども、総合計画では、「低炭素社会への転換」となっているので合わせたほうが良いと思う。どちらを変えるかというのは別として、合わせないと、全体の計画としてずれが生じてしまうのではないかなと思うので、検討していただきたいと思います。

2点目の質問ですが、P.21、P.22、これを実施計画に落とす場合は、第1節という形で、「限りあるエネルギーを大切に使う低炭素社会への転換」となって、細節として施策の柱が出てきて、細細節として施策が出てくるのが、次年度以降の実施計画では、そうなるという理解でよろしいですか。

事務局（柏木主査）

そういう認識でございます。

A委員

わかりました。以上です。

会長

最初のご質問に対する答えは、基本的には総合計画を基本にしつつ、環境という側面で、しっかりとプラスアルファしていく方針だということでもよろしいですね。ただ、その中なるべく誤解が生じないように、言葉使いなどは合わせてくださいということなので、今のご意見を踏まえて検討するというでもよろしいでしょうか。

事務局（中嶋部長）

第4次総合計画がベースということ間違いはない。期間であるとか、フレームはそこにかかっています。ただ、第4次総合計画で定量的な指標を初めて設けて、この4月から第4次総合計画が走っているので、来年度からこの計画はそれと整合性をとる。ただ、担当が申し上げたのは、2次の基本計画と今回の3次の計画の、トレンドを追いかけるときに、「あ」と書いている分が「う」となると、どれを見たらよいかわからない。「あ」に限りなく近い言葉を使いたい、そういう意味でエネルギーがあったり、いろんなことがあるので、A委員が言われたように、例えば、総合計画の言葉に合せたとしても、トレンドが見えるような形の表現にすれば、迷子にならないのかと思いますので、そこは検討させていただき

ます。

B委員

P. 3 の生物多様性国家戦略は 2012-2020 までで、この計画（第 3 次）が 2020 年からですよ。国ではすでに 2021 年度からの国家戦略に向けての議論が始まっているのですが、それについて吹田市としては、把握される努力や、研究等されているのかということをお教えいただきたい。

事務局（柏木主査）

生物多様性国家戦略については、2020 年のものについてみているので、ご指摘のとおり、次回の戦略についても努力して把握したいと思います。

C委員

P. 13 の分野横断的戦略 1：「はぐくむ」について、活動する人、団体、組織、仕組み等を養成しようという大きな考え方のもとに掲げられた目標であると思います。内容については具体的に分かり易い言葉で並んでいますが、まず質問したいことは、現在、環境サポーター養成講座が 16 年にわたって進んできていますが、これに対する目標設定とかという表現は、ここで使わない方がよいというお考えでしょうか。相当時間も経ち、お金もつぎ込んで、まさに「はぐくむ」という精神に沿った中身の講座を展開されていると思うのですが、そのあたりを伺いたい。

それから、もう 1 つは、参考資料 2 の市民団体の活動に関する調査結果でアンケート等の関連においてうまく活用し、援助して、さらに活動を活性化させるとかという方向は見出せないのでしょうか。

事務局（柏木主査）

すいた環境サポーター養成講座については、今後も進めていく。位置づけとしては分野的横断戦略の「はぐくむ」中の人材育成に含まれるものと考えております。

P. 14 の内容の箇所にある「④地域において環境保全活動を担う人材の育成」がそれに当たると考えております。

参考資料 2 については、市民団体より回答をいただいたものについては、具体的に計画を進めていく中で、これを活用し、協働して何かできないかと考えており、P. 14 の内容の箇所にある「①市民・事業者・市民団体等と協働した取組の推進及び支援」中で、どのような取組が出来るかを検討していきたいと考えています。

C委員

初めの質問についてですが、啓発イベントの参加者数を増やすとか、環境学習発表会の

参加校を増やすとか、アジェンダ 21 の事業者の会員数を増やすとか、具体的に目標値を掲げているが、環境サポーター養成講座についても同様に記載するという可能性はありませんか。

事務局（柏木主査）

活動目標を設定する中で、検討いたしておりました。すいた環境サポーター養成講座を受講した方の、人材ははぐくまれると思っていたのですが、年間の人数に換算しますと、より多くの方々がイベントに参加していただいたほうが、環境に関する知識を深めて、地域で活動してみようという、意識改革が出来るのではないかとこのところ、すいた環境サポーター養成講座も重要ではあるが、人材をはぐくむという活動目標として、イベント参加者数といたしました。

会長

「はぐくむ」のところの指標は、色々考えられる。はぐくまれる方のステージがあると思いますが、裾野を広げる、理解する、指導的な立場での活躍、色々なはぐくまれるレベルがあると思う。裾野だけ広げるのではなく、その中で活動的な立場、指導的な立場になる人がどれくらいはぐくまれるか、考慮して指標を検討されると分かり易いと思います。

事務局（中嶋部長）

養成講座の活動目標が、受講者数でいくか、卒業生でいくか、卒業後団体に入られて活動している人、どこを活動と定義するのかを、行政としても整理する話をしております。どのレベルを活動目標にするのか整理させていただきたいと思います。

会長

データとして、把握できるかどうか重要だと思うので、併せてご検討いただきたい。

事務局（中嶋部長）

どれが活動で、どれが成果なのかという整理をしないといけないと思うので、検討いたします。

D委員

「はぐくむ」のところで、環境学習発表会参加校数の目標値がなぜ全校ではないのか。全校で実施する目標値にしていくべきなのではないか。もう 1 点は環境のことというのは、一人一人の意識に関わってくる。2019 年 1 月ダボス会議でストックホルムの高校生が演説していた。その学生たちが、世界的に発信をして環境デモ等を行った。その時、フランスやドイツ等 20 万～30 万を超える参加だった。一方で、日本の参加は 200 人ほどだった。若

い世代に関心を持ってもらう事は非常に重要だと感じたので、各大学等と連携して、若い人たちと環境について考えていく等「はぐくむ」という目的を含めて、やっていったほうがよいと思う。

事務局（柏木主査）

D委員よりご指摘いただいた環境学習発表会参加校数ですが、こちらは千里リサイクルプラザと共催して行っている環境学習発表会で、指標については、環境教育目標として全校数を掲げたいところですが、教育委員会へのアプローチや、学校も環境教育だけではなく、色々な教育をしていかなければならないということもあり、調整を図った結果30校となっております。

E委員

この環境学習発表を行っている団体ですが、環境政策室からのお話にありましたように、現在学校では環境教育だけではなく、他の教育が増えており、むしろ参加校は減ってきています。資源循環に関する意識というのは段々減ってきており、学校は忙しくなっている状況で、現状を維持していくのは中々難しいということをご存じいただきたい。

会長

これは、重要な問題だと思う。先程、40代以下と、それ以外ではあまり変わらなかったという話ですが。

事務局（柏木主査）

今、50代以上の集計は提示できていないのですが、住む場所の属性等は、50代以上が緑豊かな場所に住んでいる方が多いということがあると思います。傾向としては、40代以下が重要と思っている事は、50代以上も重要と思っている等、突出して差はありません。エコ活動等で、パソコンをスリープモードにする等は、40代以下は多く、50代以上は少ない傾向にあります。子どもに関する環境教育については、40代以下のほうが大切と考える方が50代以上よりも多く、これについても、計画の中の「はぐくむ」ということについて重要視しております。

会長

次世代の子どもに対する意識啓発というのは、重要な問題として進めていかなければならないと思う。現実問題として環境学習発表会が少なくなっているのので、どういう形で意識啓発するか、どういう指標で的確に把握できるか考えていかなければならない。

F委員

現在、私にも小学校と中学校の子どもがいて、これは小学校 6 年生の国語の教科書ですが、ESD に則した内容のところがあり、先生も工夫されていて、地球温暖化というキーワードだけ使って、何度も音読をさせて理解を進めようとしているようですが、残念ながら、教員方の ESD の視点が若干足りないのか、「そういう話を聞いたよ」というので終わっているのが実情です。教育委員会の方もそういう点を踏まえて、学校教育の在り方、授業の中で環境学習を進められる工夫の仕方、関係団体とも協調しながら進められたらいいかなと思う。出来れば、教育委員会の方もこういう席に同席されたうえで、お話し進められればと思います。

G委員

今の話に関係することで、いくら学校で勉強しても、普段生活している街の中で、逆行している場面がある。例えば、子ども達が歩いているすぐ傍の戸建て住宅や、マンション等の駐車場がアスファルトで出来ていて、いくら教育でヒートアイランドと言ったところで、これが社会なんだというのではいけないのかなと。駐車場を全てアスファルトにするのではなく、もう少し工夫して行政のほうでリードしていく。そういった身近なことが、結果的に市民や次の世代をはぐくむ人に喜ばれるのではないかと思うし、そういうことも重要な教育ではないかと思います。

H委員

P. 10 の表について、分野横断的戦略で、その中身については、持続可能なライフスタイルを実践する人材を”はぐくむ”、環境に配慮したビジネススタイルに取り組む事業者を”はぐくむ”等、理念が大きく書かれています。それは、基本理念、望ましい都市像を実現するための分野横断的戦略が書かれていると思う。それぞれの目標、目的のところを見ると、P. 14 の「ライフスタイル及びビジネススタイルの転換に向けた取組を推進します」と書かれていたり、P. 16 の「まもる」というところでは、「エネルギーや資源、自然との共生を大切にするライフスタイルを構築し、将来世代へ良好な環境をつなぎます。」という事が書かれていますが、指標等を見ると落差があるような気がします。これは、戦略的な方向として書いているぐらいで、行政の施策という事が基本目標に入っているの、それを束ねるということで書かれていると思いますが、ここまで細かくすると、言葉の意味、戦略に書かれていることが少しぼけるような気がします。なぜかというと、P. 5 にある第 3 次環境基本計画の中に、地球温暖化対策新実行計画、一般廃棄物処理基本計画等、それぞれ個別の計画があつて、そこにあるような指標があげられている気がするの、その落差という感じがするのですが。分野横断別ということになると、分野の中でエネルギーとか、資源とか、こういうものを引っ張り上げて、「はぐくむ」とか「まもる」とか「そなえる」というところをピックアップするという、指標としては、新規の指標と、他の目標

に掲げてある指標と、あるものもないものと色々あると思うが、何が目標で、何が戦略かわからなくなっているような気がします。

事務局（柏木主査）

戦略は、あくまで「はぐくまれる」ことを目的としていて、まもるは「環境が守られる」を目的としています。達成目標にも分野別にもある指標とありますが、分野横断的戦略に「まもる」で達成目標を3つ掲げているのは、エネルギー消費量がひとつ達成されたとしたら、エネルギー分野においては一つの指標が達成されたことになりますが、「まもる」の目的である環境が守られるというところは、まだ達成されておらず、エネルギーの消費量とか、ごみの排出量、生物多様性の認知度が向上して、総合的に達成目標が達成されたことによってこの目的が達成されるという考えで、分野が横断している戦略になるということです。

H委員

それは、わかります。ただ、ここで書かれている戦略の方向性と、理念と、指標について、ここまで細かい指標がいろいろあるのかなという気がします。

会長

H委員がおっしゃっているのは、分野別のところは指標がしっかりとあって、横断的な視点というのは必要だと、横断的な戦略の中にまた指標が入っているわけですね。最初の「はぐくむ」というところは、独自の指標が出ていて、まだ分かり易いと思うのですが、特にわからないところは「まもる」ですね。「まもる」というのは、それぞれの分野別指標が入ったり、突然横断的なところ入ったり、指標としてあがっているものが分かりにくい。「そなえる」については、視点を変えて、気候変動に対する適応策をどう考えるかということ、大きな話なので、一本立てしてもよいと思う。そういう意味合いですね。

H委員

P. 15、P. 25 を見ていただくと、片方（P. 15）に、一人あたりのごみの年間排出量、ここが「まもる」というところの戦略のところ、達成目標になっていて、もう片方は、戦略目標という形になっています。目標と、指標がどのようになっているのか混乱する。

会長

ここは、市民の方が読まれた時に、相当混乱するのではないかと思います。

副会長

H委員の話に重ねるようですが、P. 10 の表を見ますと、「はぐくむ」にあたっているのは

対人間で、対人間対社会、「まもる」は対物的、「そなえる」は対リスクというか適応ということですよ。 「はぐくむ」と「そなえる」は後ろに入っていないので被らない。「まもる」は物的というか、空間であったり、廃棄物であったりということですから、当然被ってくるからとぼしてもよいのかというふうに思ったのですが。「はぐくむ」と「そなえる」で整理がつくかと思います。

H委員

P. 10 の図ですが、どこを横断しているのか分からないし、方向性を欠いているのではなかろうかということです。

事務局（柏木主査）

どこを横断しているかについては、例えば「まもる」で申し上げますと、P. 16 の内容の中に、関連分野というのを設けており、未来につながる環境を”まもる”については、関連分野として、【エネルギー】、【資源循環】、市民にとっての憩いの空間を”まもる”については、関連分野として【生活環境】、【みどり・自然共生】として、記載はさせていただいております。

事務局（丸谷主幹）

「まもる」については、再度検討させていただくというところをお願いいたします。

会長

まだ時間はあるので、そのあたりは再検討していただくということで。気になったところとして、前段のSDGsとの関係性というところについて、ご意見ございますか。

I委員

海洋プラスチック問題の取り上げ方ですが、P. 16 にありますが、それを含めてごみの減量というP. 26の一番上の欄にもあります。海洋プラスチック問題は今後8年間、9年間、基本計画で進めていくという時に、今後非常に深刻な問題として、生物循環をおびやかすような大きな問題という捉え方をすべきではないかと思います。ごみの減量に含むのではなく、もっとクローズアップされた問題として、啓発だとか、情報提供だとかというかたちで、取り上げていただけないかと思います。

事務局（道澤次長）

海洋プラスチックについては、吹田市の場合は都市河川で、川から海洋に流れていくというよりは、プラスチックそのものの使用を削減するということが海洋プラスチックの削減につながるという考えのもと、このような表現にしております。

会長

I 委員のご発言を受けると、そういうつながりをきちんと明記して下さいということでよろしいですね。

I 委員

P. 9 の SDGs との関係で、P. 11 の下から 4 行目にあるマーク等をつけておられるということを含めて少し表現を工夫していただきたい。

事務局（道澤次長）

書き方としては、繋がりがわかるような表現ということでよろしいでしょうか。

市としては、プラスチックごみの削減という事が海洋汚染の削減につながるという考え方で議論をしております。

I 委員

言葉の意味が重いというか、捉え方の問題だとは思いますが。

副会長

SDGs について、市民の 99% はご存じないと思いますが、SDGs を啓発するという項目はどこにもないので、P. 10 や、「はぐくむ」のところで、そういう啓発をすとかがないと、SDGs が世間に知られないまま終わってしまう可能性があるんで、そのあたりの啓発ということがどこかに入っておくべきかと考えております。もう一つ、SDGs の考え方は、市で取り組むには非常に難しい。例えば、海洋プラスチック問題は、海鳥の巣がプラスチックだらげとか、色んな話題がありますが、遠くで起こっている事を市域で取り組むにはどうしたらよいかのが肝なんです。SDGs の 17 項目の中の具体的に書かれている 169 の項目をみると、ほとんどが途上国の苦しみをどうしてあげるかというところなので、このあたりをどう表現したらよいか、答えをもっていないのですが、我々が直近として出来ることは、SDGs の教育を市内に広めるとか、そういうことを書かれるべきだと思います。

事務局（中嶋部長）

17 項目をブレイクダウンしたもっと細かいものに、今、吹田市がやっている事業で、環境だけでなく全分野のどの事業がどれにあたるか等の整理を全庁でしています。吹田市として発信が弱いと言われるかもしれませんが、吹田市行政の内部としては、SDGs のカードを持参する等、意識は高いと思っています。こういう冊子等を作る時に、市民にどのように知らせていくかをしっかり考えたいと思います。まだまだ出来ていないところもあるとは思いますが、吹田市としては着実に取り組んでおります。

副会長

市民の何割の方々が認識するかというところが非常に大きいと思うので、それをどう伝えるかが問題だと思っております。

会長

17 の目標だけをアイコンみたいに貼り付けても一般にはわからない。施策の柱とか、具体的な施策は、一つのボキャブラリーなので、ターゲットとかそのあたりを類する意味を持っているものなので、柱とか施策とかが、具体的にこういう目標を叶える意味を持っていますという整理が出来ると理解が進むのではないかと思います。どのように啓発させるかということを含めて検討願いたいと思います。

J 委員

市民に対する伝え方について、他市の基本計画を調べてみたのですが、豊中市が「未来の豊中市の姿」というかたちで出されており、その中で市民参加、資源、環境型社会、大気の問題、歴史・文化、自然との共存となど大きな方向性を出していて、こういう市を作っていくのですよということが、一般市民から見ると分かり易い。本市の計画も、もっと大きな方向性を出したほうが伝わりやすく、良いのかなと思います。

事務局（柏木主査）

豊中市の計画は、分かり易いと感じております。吹田市としても、市民の方に分かり易いと思って頂けるものを作りたいと思っておりますので、イメージ図など方向性も含めて検討していきたいと思っております。

事務局（辰谷副市長）

基本理念で書いている内容など、望ましい環境像として書いている内容としては、まだまだ見える形になっていないので、もう少し見える状態で打ち出そうと思っております。

会長

第4章以降、全体を通じての意見をお願いいたします。

F 委員

P. 29 の公害に関する苦情を解決した割合について、目標を 80% にしていることについて、他都市と比べて平成 29 年度は、全国では 85% 解決、大阪市が 87%、仙台市が 82%、広島 98% 等吹田市と比べるとはるかに超えている目標を掲げていて、市民から見た時に、なぜこの数字を目標にしているのかが分かりにくい。計算の仕方が違うのかと思い、私なりに計算してみたのですが、おそらく吹田市は、苦情の申立て件数に前年度までの申立てされ

た件数を加えて解決した件数で解決率を出しているのかと見受けられるのですが、全国や他都市は、当該年度に解決した案件だけで解決率を出している。全国や他都市と同じような数字の表現の仕方が出来ないかということを考えて頂けないかというところです。

事務局（道澤次長）

数字につきましては、F委員が言われましたように、年度に解決したものではなくて、前年度から引き継いだもの、解決未解決も含めて算出したものですので、若干低い値にはなっている。現実的な数字からすると80%が第1目標として設定していて、第4次総合計画の指標にも設定しております。その数字をそのまま環境基本計画の中の目標値として設定しております。

会長

他の都市と比べた時に問題が生じるというご指摘ですよね。だから、ここに吹田市4次総合計画に基づくと書かれていても何のことだか分からない。そこをちゃんと説明すれば分かるかと思いますが、少し配慮が必要かなと思います。これは、これまでの継続性ということも加味して決められたということですか。総合計画で決めてしまっているの、算出根拠を示すとかでないといけないですよ。

事務局（道澤次長）

別途、単年度に解決できたものについても数字はお示しできますので、毎年の進行管理の中で単年度集計の場合に何パーセントかということは、随時報告することは可能です。

会長

考え方としては、吹田市は住民サービスをきめ細かく行っており、当該年度だけではなくて過去にさかのぼっている、そういう意図ですか。

事務局（道澤次長）

未解決の部分も含めて考えている。

F委員

苦情の解決日数というのがあり、全国平均でいくと180日以内に解決した割合が95%超えている。前の年までの発生している苦情件数解決がきわめて高い。そう考えた時に68.1%だと、問題であると正直思っているところです。全国平均をかなり下回っているのではないかと思う。

会長

スピーディーにやるべきだということですね。

F委員

そう思います。

事務局（道澤次長）

なお、一層努力したいと思います。

B委員

P.14「はぐくむ」というところで、内容の③近隣市町村との連携ということで書かれているのですが、活動目標が地域材の使用量というところでしか表されていないので、例えば、他の自治体とのつながりをはぐくむというところにも大きく掲げているのであれば、他の自治体と協定を結ぶ数にするなど、近隣他市との連携をやりますと、この計画上では見えるのですが、果たして他市の計画にもそう書いてあるのか、これだけでは読めない。吹田市だけがそう思っている、他市がそう思っていないか意味がないですよ。そのあたりの整合性は必ずしていただきたいのが1つと、つながりをはぐくむというところまで掲げるのであれば、具体的な活動目標を作っていただきたいなと思います。

その次、P.15で、指標という面で目標達成に書かれている生物多様性の認知度というところで、2020年までの国家戦略をもとにしているという認識だとしても、国家戦略では生物多様性の認知度の目標が75%なんですね。吹田市としても生物多様性をやっていきたいと、よく発言をされているので、もっと目標値が高くていいのかなと思います。それに併せて、イベントの参加者数がどうかというところもあるのですが、これを掲げるのであれば、目標値の計算の仕方も、例えば現況値から目標値が18%あがるから、割合を掛けた人数にするとか、読んだときになぜこの数値なのかということが説明できるような数値をあげていただきたいと思います。

最後に、P.26ですが、第2次の改訂版等々を見ていて、この施策からエコイベント宣言が消えているのですが、それは、精査されてなくなってしまうようになるのか、なぜ消えたのかというところを教えてください。

事務局（柏木主査）

1つ目のご質問の「はぐくむ」の活動目標について、環境部としては、近隣自治体との地域循環共生圏の構築に寄与する活動としてより進めていきたいというのが、地域材を使った連携というところであるため、活動目標を地域材使用量にしております。「まもる」の目標の、生物多様性の認知度につきましては、ご指摘いただいた国家戦略の認知度も踏まえながら、イベント参加者数も併せて再度検討したいと思います。

事務局（丸谷主幹）

P. 13、P. 14 について、地域循環共生圏自体が始まったところということもあり、第 1 次的に木材利用というところがあって設定をさせていただいています。まず、今ターゲットは能勢町というところをごさいますして、担当部署間での確認書等も交わしながら進めてきておりますので、そこはいったん進めさせていただきたいと考えております。その上で、今ご指摘の部分については中間見直し等も含めて更にどう発展させていくかというところで、検討できたらと思っております。生物多様性についても、参加者数との絡みも含めて根拠的なものも示せるように再度検討していきたいと思っております。

事務局（柏木主査）

3 つ目のご質問のエコイベント宣言につきましては、今後も進めていく予定です。骨子案はマイバッグ推進に力を入れているのですが、エコイベントも推進するというので、修正させていただきます。

B 委員

地域循環共生圏の点だけ、広域と言っているのであれば、能勢町だけではなく、広域というのはどうしていくかというところをちゃんと決めないとやっていけないと思っておりますので、検討していただきたいとお伝えしておきます。やるには、吹田市がきっちりやっけていかないと、共生したいと言っていたとしても意味がないので、それ相応の吹田市の施策を進めていくというのも大事ですので頑張ってくださいと思います。

会長

広域が大事だという話を前回申し上げて、地域循環共生圏の構想は、これから重要になってくる話だと思います。吹田市は街しがなく、自然がないので、能勢まで含めた取組へ意識を向けながら、考えていくということが重要なと個人的な意見ですが、そういうことも方向性として打ち出されたら面白いかとも思います。最初の見直しの視点で、第 3 次環境基本計画の共生圏の話と、生物多様性国家戦略と大事な位置付けがされているわけですから、併せてどう展開していくのかという方向性を書くべきかと思っておりますのでご検討をお願いします。

副会長

p. 17 の「そなえる」の達成目標の指標のひとつが、「居住地周辺の夏場の暑さの満足度」というのがありますが、これから夏が増々暑くなっていくと、目標をたてても達成は逆向きだと思うのですが、この指標を設定したのはどうしてかと疑問に思いました。都市部でこれを達成しようとする本気で取り組まないと達成できないと思います。

事務局（柏木主査）

ヒートアイランド対策に対して、達成されるものはどういうものかを検討した結果、今回満足度が上がればというところで設定したのですが、再度検討いたします。

会長

事務局から他になければ、議題がすべて終了しましたので、今回の環境審議会を閉会いたします。